

## 観光フォーラム

## 「地域づくりと観光のキーワードを探る」

財北海道開発協会と札幌大学では、平成13年度に「生活みなおし型観光」に関する共同研究に着手し、さまざまな観光の可能性とそれを支える地域の仕組みやインフラのありかたについて事例調査や研究を進めています。

このたび「地域づくりと観光のキーワードを探る」をテーマにして、観光に関わる関係者と広く意見交換を行うフォーラムを開催しました。以下に提言と意見交換の一部を紹介します。

日 時 平成18年12月8日(金) 14:00～17:00

場 所 財北海道開発協会 6階ホール

## あいさつ

## ●小林好宏

財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所長  
北海道武蔵女子短期大学学長

## フォーラム講師(スピーカー) 五十音順・敬称略

## ●内倉真裕美(恵庭市)

「美しい恵み野花のまちづくり推進協議会」事務局長  
「ガーデンアイランド北海道」プロジェクトマネージャー

## ●太田 誠一(函館市)

FMいるか「じろじろ大学」主宰  
カフェ「やまじょう」店主

## ●藤 泰人(弟子屈町)

「NPOましゅうの里」代表  
写真家

## ●室谷 元男(江差町)

「江差町歴まち商店街協同組合」理事長

## コーディネーター

## ●松本 源太郎(札幌大学 教授)



## □はじめに(論点整理)



松本源太郎氏

■松本源太郎氏 観光産業は北海道で非常に大きな産業で、幅広い関連性を持っており、生活みなおし型観光は新しい概念。我々の生活が幅広い意味での観光を重視し、それをなくしては

豊かさや幸せを実感できないというところに進むだろうと考えている。観光と観光の担い手のそれぞれの意義・役割が総合されて、その地域に住んでいる人々の力になり、全体的な地域力を高めていくことにも繋がるのではないかと。いくつかの目線から今後の観光を見直していき、それが地域の力を強めていくことになれば、と考えている。

## □提言

■内倉真裕美氏 平成2年からニュージーランドのクライストチャーチを手本として花のまちづくりの取り組みをしてきた。現在では、これらの動きが恵庭から外に広がっており、「ガーデ



内倉真裕美氏

ンアイランド北海道2008」という取り組みを行っている。これは民間発の動きで「北海道は花と緑でもっときれいになる、世界から花の島北海道を見に来てもらおう、ガーデンから文化を発信しよう、夢を実現するための活動をしていこう」ということを目指しており、全道各地でフォーラムも行っている。本番となる2008年には、全道で会場を250くらいに増やしたいと考えている。作ら

れたガーデンと北海道が元々持っている自然をただ見せるだけではなく、見せ方をスキルアップさせると素晴らしいものができる。今後は道の駅やJRの駅舎を飾るデザインも計画していき、それぞれが2008年に会場となるようにしたい。



太田誠一氏

■太田誠一氏 「未来は懐かしい、過去は新しい」という感覚が常に自分の中にある。25年程前のスクラップ・アンド・ビルドの時代、当時函館には古い建物がたくさん残っていて「これが魅力だ」と感じた人達がいた。古い建物を活かすことのすばらしさや、そこに居ることの安心感といった、その場が持つ力というのがある。1984年の冬フェスティバルの実行委員会を明治館という古い建物でやったことでそのことに気付き、元町俱樂部ができた。元町俱樂部は、まちづくりグループというよりも、街を愛したり、楽しんだり、街のことを自由に話し合える西部地区の街並みが好きな人達の集まり。そういったことを伝えていくため、コミュニティFMのFMいるかで「じろじろ大学」という番組を放送している。放送は次の世代の人が聞けるように、全て保存している。地元の人でも旅人でも、そういうものを見たり聴いたりして共感してくれる次の世代が、いつか絶対に来ると思っている。人の繋がりや旅人の来る街を目指して活動をしている。

■藤泰人氏 昭和末期から平成の初め、川湯温泉は滞在型・連泊型を打ち出したが、成功しなかった。川湯温泉は景勝地なので、連泊の間にネイチャーガイドを付けて川や湖畔や森を歩か



藤泰人氏

せようという提案をした。弟子屈町にネイチャーガイドの資格を発行するように働きかけ、ガイドを養成した。これがガイド事業を行うきっかけとなった。JTと提携してレベルの高い客を案内するようになってからは順調に進むようになった。最初は15人程のガイドを抱えていたが、現在では6人ほど。ガイドの形態は、ほとんどが兼業。フィールドが小さすぎて生業にはならない。人が入りすぎると自然が破壊されてしまうので、ほどほどのところで止めるべき。宣伝はホームページと人づての紹介のみ。行政とNPOが協同で一つのを立ち上げることができたということは上

出来だと考えている。

■室谷元男氏 歴史を辿ると、江差の文化は北前船が運んできたのが分かる。昭和61年に淡路島で復元された北前船を江差に運ぶイベントを行った時、自分達の身近にある歴史的遺産を再



室谷元男氏

認識しようという気運が高まった。平成元年に北海道の戦略プロジェクトで歴史を活かしたまちづくりのモデル地区に指定され、平成4年に商店街組合が発足した。コンセプトは「北前の息づくまち」と、古い職人さんの町でもあるので「温かい技と一緒に生きる町」。歴史をテーマにした野外劇のイベント、歴史的街並みの保存と継承等を行っている。資源を大切にしたい身の丈にあった持続可能なまちづくりが私達の基本的な考え方。今後も交流をテーマにしたまちづくりを進めていきたい。現在は、国交省の半島振興の助成金で「100人の語りべ」の調査事業に取り組んでいる。1人1人の住民が江差に来た方と、どういった交流ができていくのか。あえて観光と言わずに交流を深めていくことが、町の将来に繋がっていく。1人1人が語ることによって街全体が語る。交流の場になるような語りべの町にしたい。

#### □意見交換



小林好宏氏

■小林好宏氏 これまでの観光は、地域振興や地域活性化という発想が中心だった。人口が減少していく中で、地域が活気を持つていくにはどうすれば良いかというのが根底にある。地域

で、より充実感を持って暮らせることが求められる時代になってきており、所得などの数字で表現されない部分に大事な要素があるが、雇用機会がなければ生活そのものが成り立たない。パイが小さくても働く場があって、多少なりとも生活できる状況は必要。地方の小規模の観光が雇用機会になるのか。活発な活動が雇用と結び付くのか。それが一方の問題としてある。

■札大・佐藤郁夫氏 兼業としての観光がどれだけ大きくなるかは分からないが、生活者と旅人が地域を



佐藤郁夫氏

同じ目で見ても、お互いに語りあう魅力というのが生まれることによって、新しい何かが生まれてくれば良い。今日のフォーラムの講師の方々のように、情報を発信し合っていれば、どこかで結びつく。ある種の必然性がある、地域の活性化や地域の魅力が相乗効果で生まれてくるのではないか。

■**松本氏** 今後は、地域の中の様々な場面で複雑な意志決定をどのように進めていくかが大きな課題になる。人と人との繋がりが不可欠な事業は、そこに携わる意識の共同が必要。多様な意見を如何に集約化していくかが鍵になってくる。利益だけでは地域をまとめることはできない。

■**内倉氏** ガーデンアイランドで大事なものは人。ただ景観を見せていくだけではなく、その場所の文化や食べ物などを複合的に発信していく。文化の町を作りたいという意識が根底にある。それぞれの町の人が考えていくことによって、北海道の魅力が最大限に活かされる。

■**太田氏** 函館はテレビや映画のロケーションが多い町で、私はフィルムコミッションもやっているが、行政だけがやっても型通りになるのでダメ。民間と行政の良い形の関係作りを地域の中でどのようにやっていくかが重要。経済効果のためのフィルムコミッションではなく、地域の人から自分の町の情報発信をした結果、観光客の誘致に繋がるという意識でやっている。まちづくりも北海道全体との連携で、互いに補い合うような大きな視野で、全体で先を見据えた関係性を作った方が良い。

■**藤氏** 観光に来たお客さんに、何を持って帰ってもらえるか。「旅」と「旅行」は違う。今は「旅」の時代。良い知識をたくさん持っていて、お客さんに驚きをたくさん与えられるガイドは、たくさん指名があって仕事が増えていく。それが雇用に繋がっていく。お客さんは心を求めている。雇用はコミュニティビジネス的なものだが、たくさんの人達にそれができるようになれば、川湯温泉というのは日本一になれると考えている。

■**室谷氏** <sup>うばがみ</sup> 姥神祭りが始まった頃は、鯨や北前船という産業背景があったので、経済があって文化が育ってきたのではないかと。経済がしっかりしていなければ文化の伝承も難しく、現在は非常に厳しい状況。人との交流をいかに醸成させてまちづくりに繋げていくか。各々の分野の人達ができることをやって次に繋げていくということが必要。

■**会場A** これまでの観光は行政主導で、民間も

それに甘えていた部分があったと思う。しかし今後は民間主導で兼業から始めることこそが、そこから新たに専門の芽として生まれてくるのではないかと思う。行政サイドは許認可や規制緩和といった部分で黒子に徹して応援したり、民間でできないことに尽力する、そういった関係性がこれから必要になってくるのではないかと。

■**藤氏** 行政に甘えていた部分は確かにある。でも、それではだめだということに気が付いて、「自分達の町は自分達の手で作るんだ」という、独立独歩の方法を、今、川湯は探り始めたところ。

■**太田氏** 行政と企業と市民の関係で、行政が指導してきた歴史は長い。これからは行政と市民が寄り添っていかねばいけない。次の世代のために持続可能な社会を作っていきたい。

■**会場B** 観光を地域経済に回していく場合、交流があって、お土産が売れて、といった経済的な循環がないと広がっていかないと感じている。その種を交流の中にどのように組み込んでいるのか。

■**室谷氏** まずは知名度を上げていかななくてはならない。姥神祭りでは人が帰ってきたり観光客が来たりするので、その部分を広げていきたい。江差は職人の町でもあるので、技術の伝統を伝える、あるいは冬場の暇な時期にお土産品の開発をするなど、夏場のオンシーズンに向けて備えるべきことはたくさんある。

■**藤氏** 川湯温泉は、ホテルが客を囲い込まず外に出す仕組みに変えてから、元気の良い町になってきている。観光客が観光資源になった時に、初めて温泉街が完成して潤っていく。潤っていけばお客さんが増えて雇用も増える、経済も浮上していく、町が元気になってくる。川湯はそういった形で、少し芽が出てきている。

■**太田氏** 行政の担当者は3～4年で変わってしまう。行政も人を育てるということをしなければ民間とフィットしない。行政内の連携も必要だと思うし、変化していくべき。

■**内倉氏** 行政同士で横に繋がると、スムーズに物事がすすむようなことがあると思う。資金も少なくて済む。皆が協力し合えば、より良くなる。協力体制を是非設けてほしい。

■**松本氏** 今日は、来ていただいた方達との交流が始まる場を提供することができたことに感謝している。これで閉会としたい。

文責：齊藤新人（開発調査総合研究所）